

2012 - 2016 年 科学研究費補助金
「新学術領域研究（研究領域提案型）」

現代文明の 基層としての 古代西アジア文明

—文明の衝突論を克服するために—



newsletter

Vol.5
March
2015

科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」
『現代文明の基層としての古代西アジア文明－文明の衝突論を克服するために－』

2012-2016 Grant-in-Aid for Scientific Research in Innovative Areas
the Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology in Japan

**“Ancient West Asian civilization as the foundation of all modern civilizations:
A counter to the ‘Clash of Civilizations’ theory”**

Newsletter vol.5 March 2015

CONTENTS

調査報告

2014年7月トルコ・カッパドキア地方調査報告	1
2014年度スレイマニヤの古環境・地形・地質調査	7
カッパドキア遺跡・ウズムル教会の保存にむけて（2014年度調査）	11

研究集会報告

イラン地質調査所による考古地質学ワークショップに参加して	15
西アジアにおける宗教伝統の継承と変遷～西洋史と東洋史の断絶を超克する～	17
“Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources” 「新アッシリア研究における異種資料の相互作用・相互影響・相互補完」	18

NHKBSプレミアム 体感！グレートネイチャー 「潜入イラン！炎と緑の大地」撮影報告	21
---	----

文部科学省による本科学研究費助成研究事業中間評価を受けての将来検討会	24
------------------------------------	----

シンポジウム・研究会開催予定 / 活動履歴	26
-----------------------	----

2014年7月トルコ・カッパドキア地方調査報告



Aksaray大学の研究協力者と

安間 了

Ryo Annma

筑波大学生命環境系・講師

7月14日から31日にかけてトルコ国カッパドキア地方の火山砕屑岩シーケンスの調査を行った。調査の目的は、カッパドキア奇岩群を構成する火山砕屑岩の詳細なフィールド記載を行い、岩石の年代、化学組成、透水性などの物理特性を調べるための試料を採取することである。これらによって、大規模な火山砕屑岩を生成する噴火のメカニズムと起源を明らかにすることが研究の目的である。透水性などの物理特性は、岩窟教会の保存のストラテジーなどを考える上で基礎的なデータとなる。また、昨年9月からカッパドキア地方の3地点で雨水の定期的な採水を始めており、これらの回収も調査の目的である。調査の参加者は報告者の安間、東京大学地震研究所の折橋裕二博士、筑波大学4年生の潮見和幸、現地アンカラ大学の院生のCunhurさん、学生のEnesさん、Onorさんの6名である。トルコ鉱山局(MTA)のEnder Sarıfakıoğluさんとアンカラ大学のYusuf Kadioğlu教授には調査のための便宜を図っていただいた。また、Aksaray大学のBahattin Gullu博士、Nevşehir大学のAhmet Orhan博士には、雨水の採取とフィールドの案内を引き受けてくださった。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

7月14日

西アジア文明研究センターで会議後、研究ラウンジでタイ巡検の説明会。13時に同行する卒論生の潮見さんと西アジアセンターで落ち合う約束をしていたが、20分ほど遅れる。センターに行くと、半年前にスレイマニヤで会ったオスマンさんがきている、廣永さんが産まれたばかりの娘さんをつれてきているので、大賑わいである。潮見くんは地形図を印刷している。荷造りをすませ羽田で22時に落ち合うことにして解散。雑務を片付けて、羽

田に到着したのは20時過ぎになってしまった。潮見さんと荷物をチェックインしたあと、地質学会講演要旨の修正版を送付し、巡検案内書の修正校を確認する。22時過ぎに今回の調査に同行してくれる東大地震研の折橋さんと落ち合う。

7月15日

時計が新しい日を示したところで、予定よりやや早く搭乗する。新鋭の878型機だそう。機内ではゆっくり休めたが、ドーハでは乗り換えターミナルまで急ぎ足で、まだ建設中の空港の端から端まで歩いた感じである。ターミナルで地質学会巡検案内の校正を仕上げ、地質学会編集部に送る。食事が出たとき以外ほとんど寝てしまうが、メソポタミアをなぞるように飛行したようだ。12時過ぎにアンカラ到着。AVISで新品のフォードを借り、Ankara Plaza Hotelにチェックインする。昼は3人で歩いて市中の魚屋レストランへ。一休みしてから、MTAのEnderさんとアンカラ大学のYusufさんに到着した旨のメールを送る。折橋さんが地震研経費への申請が認められたというニュースをすぐに知らせてくれる。これでチリの火山調査も継続できることになった。晩は近場でカバブを食す。ラクを3杯引っかけホテルへ。IODPで議題に上がっている日本海呼称問題へのコメントを考えているうちに、寝てしまう。

7月16日

朝の礼拝の音で目が覚める。日本海呼称問題についての回答案について、関係者に回覧メールを送りレポートを書いていると、1時間後にはすでに3件の返事がある。10時すぎに三人そろってタクシーでMTAへ、オフィスの前でEnderさんとMustafa Sevinさんにあう。元気



Avanos西方の石切場露頭

そうしている。お土産を渡し、準備してもらった輸出許可申請書の札をいう。精一杯のことをしてくれていると思う。昨年度採取した試料について、潮見さんが出してくれた年代データを説明し、検討する。中央アナトリア地塊については、本当に情報が少ないようである。お昼過ぎに挨拶を交わしMTAをでる。入り口のゲートでタクシーをひろってくれる。たいへんありがたい人たちである。そこからアンカラ大学へ直行。門前のレストランで鳥と羊のカバブを頼む。鳥に味があって、おいしい。さて、ここがYusufさんのキャンパスと思っていたが、どうも違うらしい。門衛に聞くと、地下鉄の行き方を説明されたが、3人で地下鉄に乗るのも億劫なので、タクシーで行くよ、という行き先を書いてくれた。親切な人たちである。約束の1時半に20分遅れでつくと、Yusufさんもまだ帰っていないとのこと。博士過程学生のCunhurさんが相手をしてくれる。Yusufさんが帰ってくると、挨拶も早々にデータの説明をする。いろいろ突っ込んだ話をしたが、大体のところは納得してくれた様子である。今回のフィールドワークの手配の話に移ると、まことに要領よく、こちらのやってほしいことをオファーしてくれる。結局Cunhurさんが21日から学生も連れてカッパドキアに来てくれることになる。雨の回収にもつきあってくれるということで、大助かりである。雨はYusufさんが信頼できる人たちに仕事をまわしてくれたようで、AksarayとGuzelyurtではAksaray大学准教授でYusufさんの弟子のBahattin Gulluさんが採水してくれているという。その

奥さんがYusufさんの研究室で助手をしていて、挨拶することができた。NevşehirとÜrgüpではNevşehir大学のAhmet Orhan博士がやってくれているとのこと。何ともありがたいことである。

Yusufさんはラマザンあけにもかかわらずアンカラにいて、水と石の輸送を請け負ってくれるという。母君が病気がちのことで少し心配である。水については、日本語のcertificateを書いて送らなければならない。4時から Kızılayで会議があるということで、再会を約して別れる。忙しくてなかなか捕まらないが、いるときはじつに効率よく物事を片付けてくれる人である。

大学前からタクシーをひろい、ホテルへ。折橋氏はビール、こちらはラクをいっぱいやる。ややこしい話は片付いたので、あとは調査に出るだけ。乾杯である。夕食は8時からでることにしたが、8時になるとみんなレストランに出てきてラマザンの終わるのを待ち構えているようだ。どこのレストランも満席で、席があるのはパブの類のみ。仕方がないのでホテルのレストランで食事をし、10時半には部屋に戻る。

7月17日

9時前に日本海呼称問題についての意見をJRFBに提出する。これで大きな懸案事項のうちの一つについて、アクションを起こしたことになる。食事を済ませ、現金を引き出し、ホテルの支払いをすませ、車の整理をしていると潮見さんと折橋さんがおりてくる。ホテルのフロント

に次の予約を確認して、カッパドキアに向けて出発。本日はKırşehir massifの試料採取位置を確認しながらGöremeをめざす予定である。Elmadagで沈み込む海山の露頭を見ながら、Pontidesと中央アナトリア地塊との衝突関係と問題点を話し合う。KIRO6の層状ガブロの露頭で追加試料採取。今回のfirst samplingでKIR101から番号を付けはじめる。カマンの町でレストランを探すがラマザンの途中であるためか、開いているレストランはなさそうである。開いていたスーパーマーケットで食料を仕入れ、そのまま湖畔のKIRO4露頭へ行く。遠回りになるがここから塩湖へ抜け、Aksaray経由でGöremeへ向かうことにする。塩湖へのみちも快適なドライブであった。車中で軽食を取りながら、Aksarayへ。Hasan火山がうっすらと見える。AksarayからNevşehirへ向かう途中にいくつものコーンを見る。花崗岩の基盤が出ている。ガソリンを補給して、そのままGöremeへ。Heybeホテルにチェックインする。二人部屋が狭いので、何とかならないか尋ねると、同じ値段でスイートを使わせてくれるという。入り口のひろいスペースに二部屋がついた理想的な環境である。ボーイにチップをはずみ、女主人に日本からのお土産を渡す。荷物を下ろして、Uçhisarを見学に行き、フィールドの全景を見渡す。夜はGöremeのMy Mother'sで食事。

7月18日

フルーツが主体の朝食にメネメンをつけて食べる。潮見くんも折橋さんもメネメンは気に入ったようである。シャワーを浴びて、ようやく復活するが、出発は10時過ぎになる。赤い河の谷頭の駐車場に車を止め、ウズムル教会へお入りして水分を補給。管理人のイブラヒムは顔を見てすぐに声をかけてくれる。良く覚えてくれたもので、こちらですぐに旧知同士の挨拶になる。今回の調査の目的などを話しながら、絞ったジュースをいただく。前回久田さんといったコースをほぼたどりながら、赤い河とRose Valleyに沿った柱状図を作成し、簡単なマッピングをする。豆石層の層準が幾つかの露頭でき、柱状図の中での位置がようやくわかった。Göremeのセクションはカッパドキアの火山砕屑岩シーケンスの中で結構下側になるのだ。Emirのカフェで生ジュースを飲み、さらに缶ジュースを二本ずついただいて水分補給する。EmirはCavusinに住んでいて通っているとか。このあたりの土地は先祖代々の持ち物であるが、建物は政府の管理下にある、という。帰りは層準を確認しながらイブラヒムのレストランへ。遅めの昼ご飯をいただく。ヨーグルトソースをかけた肉詰めのパスタは日本人にはややしつこい感じだが、スープもパンもフルーツもおいしい。

プロジェクトについてイブラヒムと話し合う。イブラヒムは井戸にセンサーを入れることについてやや心配している様子。何度か同じ説明を聞きながらようやく問題点がわかった。筑波大学の谷口さんに問題点と対処法を伝えることを約束して別れる。

NevşehirからDerinkuyuへ抜ける。Derinkuyu東方のコーンで流紋岩の熔岩を採取。さらにDerinkuyu側で黒雲母を含む白色の凝灰岩を採取する。これはDerinkuyu東方のプラトーの上位を構成する溶結凝灰岩に連続する可能性がある。さらにDerinkuyu西方の火山岩地帯をめざし、安山岩の熔岩を採取する。

ホテルのプールでひと泳ぎしたあと、遅めの夕食はCappadokian Cuisineでとり、早めに寝ることにする。

7月19日

火山砕屑岩シーケンスと基盤岩との関係を押さえるため、Avanos北方の基盤岩の露頭をめざす。Oligoceneの大陸性の珪質砕屑性堆積岩とJurassicの付加コンプレックスの記載と試料採取をする。遅めの昼はOzkonak地下都市の目前でサンドイッチを出してくれる。火山砕屑岩を掘りこんだ地下都市を見る。入り口の裏手が採石場になっていて、くず石が捨ててある。言葉が通じないので採取はあきらめるが、あとで戻ってくることになるであろう。帰りがけにAnanosの赤い河で採水する。

7月20日

Ürgüp東方の安山岩をめざす。Upper Mioceneとあるが、プラトーの上を覆っており、明らかに若い。安山岩の火道角礫岩と断層によってきられた凝灰岩があったので記載と試料採取をする。プラトー最上位の安山岩熔岩と火山砕屑岩セクションの柱状図を作成する。お昼はÜrgüpでとる。メネメンがとてもおいしい。ミルクセーキも結構な味である。ふたたびDerinkuyu方面にでて、基盤岩と流紋岩の火山を採取する。



Nevşehir大学の共同研究者と昼食



Hasandağで火山岩の採取

7月21日

朝8時前にメールを見ながら朝食をとる。ルンド大学のYngve Cereniusから日本に来るとの便りがある。岩石をホテルに預けて10時頃に出発。まずは一番古いシーケンスの出ているところに偵察に行く。そのままAksarayへ行き大学北にあるドライブインで昼食をとる。Iskembeのようなスープとラムチョップスの煮たものおいしい。大学の正門まで行き、守衛に来意を告げると、雨水を集めてくれているBahattinさんが運転する車で、Cunhurさんが正門まで来てくれる。Bahattinさんのオフィスにいくと、鉱床屋のErkanさんも来てくれて挨拶をする。これから調査を手伝ってくれるアンカラ大学学部生のEnesも来ている。雨水試料を受け取ったあと、お言葉に甘えてAksaray付近の地質をお二方に案内していただく。Hasandağの東側のコーンからまわりはじめ、Ihlara渓谷を遠望する。雨水を採取している山あいの大学分校も案内してくれる。Kızılkayaで火砕流堆積物のサンプリング。基盤のフズリナ石灰岩からKızılkaya ignimbriteまで連続露頭が観察できる場所を案内してもらう。基盤の露頭でBahattinさんとErkanさんとは別れる。CunhurさんとEnesはこれから一緒にフィールドワークである。

7月22日

10時頃に昨日のお礼のメールを書く。Ürgüp南西の単成火山に登頂し、デイサイト質のブロッキーな熔岩を採取する。その下のセクションがTheodore岩窟教会付近に露出しているのを、2時間かけて柱状図にとる。昼はÜrgüpのまちで食べる。場所がいいが、やや高い。トルコ語のできる案内を得たので、北に向かい、Özkonak地下都市を再訪して試料を採取する。前回道沿いに見つけた褶曲の露頭を案内する。

7月23日

だいぶ疲れがたまってきた様子である。朝10時に約

束していたAhmet & AyseのOrhanさん夫妻に会いにNevşehir大学へ行く。雨水試料を受け取って、火山碎屑岩シーケンスの最下部の火砕流堆積物を採掘している採石場を案内してもらう。昼はご夫妻を招待して、ÜrgüpのKolcuoğluで遅めの昼食をとる。昨年Adanaから進出してきたという、とてもおいしいレストランである。2メートルもありそうな細長の板にアダナ・ケバブが載ってくる。食べきれないくらいの量があるが、一人ずつのプレートで注文するよりもずっと安い。午後はÜrgüp南の、火山碎屑岩シーケンスの下から二番目とされる熔岩を取りに行く。今晚深夜のバス便でCunhurさんは帰るといふ。23時前にアンカラ大学学部生のOnorが交替に着く。

7月24日

5人で昨日教えてもらった採石場に行き、セクションをきる。幸いにして基盤の堆積岩が出ているようで、Kavak火砕岩の一番下位の層準から連続的な柱状図を作製することができた。採石場では状態の良い透水試験用の定方向試料をとらせてもらう。昼は赤い河沿いのレストランで食べる。ついでので、対岸から見えていたAvanos西の石切場を見に行くと、トラバーチンであった(現地の人オニックスという)。試料はとらなかったが、硫黄に富んだ水が湧出しているということで、石灰岩ではなく、石膏が析出しているのであろう。

Rose Valleyに行くが同じことで、Zelveの境界の下のKavakが見えている。この下にあるはずのobsidianの地層は見えないが、イブラヒムの言っていた、地下120mにあるソーブストーンというのがそれかもしれない。だとすると、Upper Kavakは結構厚いことになる。いずれにせよ、午前中のKavak下位セクションと上位のセクションとの間には空隙が空いてしまう。豆石層の下に層境界を引いているのが、よく理解できない。5時半頃帰着。夕食は9時ということにして、それまでは自由時間とする。

7時頃テラスにおりていくと、EnesとOnorがすでにピ



Hasandağ西方で見つけた火山弾



ボアズキョイの風景

ールを一杯やっている。乾杯は“シェレフェ”だそうだ。ビールを飲みながらErsoyさんとYusufさんにメールの返事を書く。夕食はSultanへいく。ホテルのオーナーが奨めてくれた店である。タシ・カバブを頼むと、ここのはうまい。おまけにそんなに高くない。人の推めることは聞いておくものである。

7月25日

いつも通り、8時に食事。10時に出発することにして、支払いを済ます。石は2日間置いておいてもらうことにする。5人プラス荷物で出発。午前中は赤い河のトップシーケンスの柱状図を作成。丘の上からの眺望がすばらしい。13時頃にイブラヒムのレストランへ行って昼食をとる。EnesとOnurに豆石の層準を見せる。イブラヒムのManzaraの農場からの眺望もすばらしく、全体が見渡せる。ここでも井戸を掘りたいという。層位的にはZelveの一番下なので、おなじことならこちらの方が深いところまでわかりそうである。

午後はAcigöl付近の単成火山、石炭が燃えているという場所に行ってみるがそれはわからない。南に下って、古いとされる安山岩のでているフィールドへ。斜長石斑状の安山岩が確かに出ていて、これは古そうである。地域ごとに柱状図を作る必要がある。

Aksarayのホテルへ向かう。都市部の見通しが利かないのと一方通行で、ホテルにつくまでにちょっと苦労す

る。シャワーを浴びて飲み物を買って食事へ。ビールは出さないとのことのでがっかりする。そのまま寝るつもりでいると、Enesが外からビールを調達してくれた。免税店で買ったGlenlivetを一本持って行く。音楽を聴いて話をしているうちに結局一本空けてしまう。

7月26日

朝は9時半から町に出て朝食。Kelle Paçaを食す。EnesとOnurに荷造りをさせて、10時半頃出発。Hasandağにとりつく。山頂へ向かう道のどん詰まりまでいくが、車の馬力が足りない。勢いをつけてようやく急坂を登り切る。ほとんどキャンプ生活をしている人たちがいて、石をたたいていると子どもたちが寄ってくる。Hasandağ西方のコーン群に登り、火山弾の形の良いのを採取する。南からもHasandağにアプローチし、結局一周して結構な量の試料が採取できた。今日はIhlaraのセクションも片付けたかったが、いったんHasandağにとりつく、そればかりになった。町のレストランで食事をしたあと、EnesとOnorはアンカラへ戻る。

7月27日

さすがに朝は疲れている。8時には起きたものの、9時に集合とする。朝食抜きでホテルを出発して、ガソリンスタンドのレストランでKelle Paçaとメネメンを食べる。21日にBahattinさんに教えてもらったIhlaraのセクシ



Cunhurさん一家と記念撮影

ョンを切る。フズリナ石灰岩の基盤が出ているところからKızilkayaのてっぺんまで柱状図を作製する。透水試験用の試料も採取する。Selime凝灰岩とっているものは火砕流である。層厚変化が激しく、Selimeでは100mを超える厚さがあるが、セクションを切った西側では10m程度である。

Göremeのホテルまで戻り、岩石を回収。Avanosの川岸のレストランで遅い昼食。Kayseriへ向かう。Erciyes火山の南麓をまわって、試料や写真を撮りながら町に入っていく。あいかわらずの喧噪と交通マナーの悪さである。Caravansarayを見学し、早めにGrand Erasホテルに帰ってレストランでラクをやっていると、モスクの声が聞こえてきて、花火が二発上がる。ラマダンの終わりである。あすからはBayrem。晩飯はそのままホテルのレストランで食べる。

7月28日

朝、Erciyes火山のスキー場リフト駅までのぼり、火山岩を採取する。これでカッパドキアの仕事は一通り終わったことになる。アンカラに向けて走り出すが、せっかくなので北上してボアズキョイの遺跡を見ていくことにする。1998年に一度来ているはずなのだが、あまり記憶とあわない。お土産物をもった案内の人たちがどこに行っても寄ってくる。ふんふん説明を聞いていると、石細工をたくさん買う羽目になった。村で食事。長いドライブのあと、夜になってAnkara Plaza Hotelにいたる。

7月29日

Yusufさん、Cunhurさんと電話で打ち合わせて、アンカラ大学に石を置きに行く。結構な量になったが、だいじょうぶ、だいじょうぶと引き受けてくれる。今後の共同研究の打ち合わせをする。いったん別れたが、夕方になって渡すものを忘れたことに気がついた。Cunhurさんの実家は泊まっているホテルからほんのひとブロック、坂を登ったところである。アンカラ大学から借用していた調査証を返却しに行く。これですべての調査日程を終了した。

7月30日

ゆっくりと支度を終え、荷物をフロントに預けてアナトリア博物館を見学、アンカラ城に登る。博物館は補修を終え、全体を見ることができた。石と粘土の文化は印象深い。15時ころにいったんホテルに戻り、レンタカーでアンカラ空港へ。引き渡しも簡単にすみ、荷物のチェックインも問題なくゲートに入る。

2014年度スレイマニヤの 古環境・地形・地質調査



Said Ahmadan付近の段丘堆積物の断面

安間 了

Ryo Annma

筑波大学生命環境系・講師

9月1日

朝6時半、冬の雨がちのニュージーランド国際巡検から、残暑の日本に帰国する。帰宅して書類の整理、荷作りで午前中を費やす。午後は空港までのバスのチケットを買い、大学で残務整理。18時前に西アジア文明研究センターの長谷川さんに送ってもらって、つくばセンターへ。バスには一人きりしかいない貸し切り状態である。バスの中から地質学会屋久島巡検の案内を参加者に送る。8時過ぎに羽田着。どこの店も混んでいるが、空くのを待って、寿司を食べる。一日だけの日本食を楽しむ。

9月2日

ドーハの空港は、二ヶ月前よりもよほど整備されている。工事中だった部分は目立たず、ほとんど店舗で埋まっている。スレイマニヤ行きの飛行機はがらがらである。窓際の席に換えてもらったが、地質構造がきれいに見えて、正解であった。スレイマニヤに近づくと、ザグロス褶曲帯の後縁部の切り立った褶曲構造がきれいに見

えてくる。もう一つ背斜になっているところを越えるとその背斜構造の軸部の広範な盆地にスレイマニヤの町がある。クルド自治区に緑が多いのに対して、南部はほとんど不毛に見える。チグリス・ユーフラテス側に座ればもっと違った印象を受けたかもしれないが、土地の区画も、黄色に染まってうっすらとしか見えない。

空港に旧知のサバさんと運転手のアジズさんが迎えに来てくれている。このままQalat Dizahまで行く、2時間の行程だという。スレイマニヤの町を横に見ながら北西へ向かう。背斜が作るリッジが右手に迫ってくる。車の中でBakr Awa遺跡のレポートを見せてもらう。夕前にQalat Dizahの宿所に到着。日本からは、常木さん、サリさん、そして中部大学の西山さん。イラクからはラニアの考古学責任者のバルザンさんを加えて3人が参加している。もってきたウイスキーをあけて11時頃まで話をする。

9月3日

朝5時に起床。お茶を飲んで、6時頃出発。朝日に山の際が輝いて美しい夜明けである。Said Ahmadanの発掘サイトまでは10分程度のドライブ。一日のサイクルは、6時出発、到着後にすぐに発掘開始、9時から30分間朝食と休みをとり、途中15分の休憩を入れて13時で発掘終了。あとは帰って昼食を取り、資料の整理をする、と地質調査とはだいぶペースが違う。発掘サイトをあとに、朝日を浴びながらひとりで露頭の見えている北西側の丘に向かう。村の中をやあやあと挨拶をしながら通っていくのだが、調査用具で膨らんだフィッシングベストを着て、調査用のつば広の帽子をかぶっているの、すっかり村の人を警戒させてしまったらしい。トラックが丘の方からやってきて、誰何される。車中を覗くとAKをも



Said Ahmadanの発掘風景



Hero遠景

っている、自警団の人らしい。英語もしゃべれるし、パスポートを見せるとすぐに納得してくれた。スレイマニヤの防備は万全である。羊飼いが向こうからやってくるが、やはりかなり警戒している様子であるので、ベストもハンマーもリュックの中に入れて行動することにする。基盤岩は、泥質なものも含んでいるが、基本的には石灰質の変成岩(大理石)である。9時までにはまだ時間があるので、今度は沢沿いに下ることにする。広い扇状地堆積物の浸食が進んで、脇に狭い氾濫原の中を流れが蛇行している。攻撃斜面側に堆積物の露頭が見えるが、場所によって礫岩だけだったり、細かいものを挟んでいたり、蛇行している川の堆積システムを見ているようである。9時にサイトに戻ってパンとクリームチーズ、オリーブといった簡単な朝食をとる。朝食後は発掘の様子を見ながらぶらぶら過ごす。テルの基部にはカーチができている。これが扇状地の上面で、テルの基盤になっているようである。

1時に引き上げて、アパートで昼ご飯。挽肉の揚げ物を香辛野菜と一緒にパンにくるんで食べる。これがなかなかうまい。昼食後は発掘資料の整理をしたり、ものを書いて過ごす。西山さんとサリと連れだって夕食の食材を買いに出る。夕方、常木さんが人足の給料の勘定をしている。ガードや人足を12人も雇っているし、考古局の人たちにも手当をしなければならないので、たいへんである。宿所にしているコンクリートを打ち放しのがらんだりの部屋に机といす、エアコン、冷蔵庫をそろえるのも一苦労だったらしい。ちょっと食料をかうとすぐ30ドルく

らいはかかるし、飯たきを雇うと一回40ドルだそうで、あまり安くはない。夕食は常木さんのレンズ豆スープ、西山さんのなすの炒め物、サリの作ってくれたサラダでたべる。発掘の人たちはストイックにやっていると思う。

9月4日

今日は川沿いに地形を見ながら下流のKushqalatまで下ってみることにする。昨日はすっかり村人に恐慌をもたらしていたらしく(村人を発掘に雇っているのだし、日本人がここにいるのはわかっているだろう、と思うのだが)、一人で歩かない方がよいということで、発掘チームから一人若い人をつけてもらう。ソランさんという、英語の達人な好青年である。ところどころで高台に上がって地形をスケッチしたり、露頭を観察したりしながら川筋を降りていく。発掘しているテルは扇状地の上にあるのだが、その面よりも高いところに河岸段丘の堆積物が分布している。早起きなので、朝飯前に結構な仕事ができる。

発掘された遺物を眺めていると、はんれい岩でできた大きな石臼が目についた。このあたりには見かけない岩相なのでスレイマニア大学のYousif Mohammadさんに問い合わせると、ここから30kmほど南西に下ったHeroという集落あたりにオフィオライトがあるという。詳しい情報をお願いしていたら、昼前に地質図をメールで送ってくれる。昼食後に一休みしたあと、サバさんとアジズさんと連れだって、オフィオライトを見に行く。露頭は良く、はんれい岩と超塩基性岩の境界がきれいに出ている。今回は偵察であるが、年代測定用の試料を幾つ

か採取することができた。こども、詳しくマッピングする価値はありそうである。

9月5日

Operation Bのトレンチで帯磁率と帯磁率異方性測定用のプラスチック・キューブ試料を採取する。トレンチを掘ったすぐはともかく、しばらくするとからからに乾燥して、そのままキューブを差し込むことができない。なかなか手間がかかるし、粗粒の堆積物なので歩留まりが悪い。お昼はラニヤの町にあるバルザンさんの家に招待される。美しい奥さんの作ってくれた、気合いの入ったごちそうである。バルザンさんは我々と一緒に宿所まで戻るといふ。隣町なのに律儀な人である。ザブ川が褶曲山脈を削り込んで南流するところに橋が架かっている。昔の征服者の功績をたたえたレリーフがあるという。

9月6日

来たばかりのような気もするが、本日は発掘調査前半の最終日である。あすにはスレイマニヤの町に戻ることになる。Operation Aのトレンチで帯磁率と帯磁率異方性測定用のプラスチック・キューブ試料を採取する。トレンチ奥の東西面から試料をとるが、表面はすでに乾いて堅くなっているし、硬石膏や礫サイズの粒子もところどころに含んでいるので、ナイフで露頭面から2cm角のキューブを削りだして、プラスチック・キューブを押し込んでいく。結構時間のかかる作業であるが昨日よりは能率が上がる。トレンチの底にvirgin soilがでていたので、そこからもキューブ試料を採取する。こちらは湿気のある細粒堆積物で、簡単に試料がとれる。せっかく日本から携帯式のドリスコアラを担いできたので、トレンチ底のvirgin soilからコアリングを試みることにする。新しく開発した径の大きめ(直径4cmくらい)のパイプを使うが、エンジンは小さなままなので出力がたりない。少ししまった粘土質層であるが、60cmほど下にあるカーチ層に達するまでに、結構手間がかかってしまった。とはいえ、トレンチを深くする手間に比べようもなく簡単に、virgin soilの下にカーチ層があることを確認できたのは大きな成果であった。うまくすれば、年代も特定できるかもしれない。常木さんは手伝ってくれた村人たちに給料を支払っている。発掘を手伝ってくれている村人の何人かは、ペシュメルガ(クルド人部隊)に加わって対イスラム国の防衛戦に参加するという。モスルはすでに遠巻きにしているらしい。無事であれかしと願う。

9月7日

いつもよりやや遅めに起床して朝食を取り、部屋を掃



バルザン家の昼食



石灰岩の露頭とザブ川

除する。バルザンさんと別れ、1台のピックアップに残りの6人が乗り込んで、スレイマニヤへ向かう。ザブ川に架かる橋の手前で川におり、石灰岩に刻まれたレリーフを見る。たしかにおぼろげに残っている。

スレイマニヤに到着すると、早速考古局へ挨拶に出向く。カマルさん、ハシムさんに半年ぶりに再会する。昼は日本からのグループで近場のカバブ屋へ。そのあとビールを買って、皆で飲む。さすがに発掘現場の田舎町ではお酒を飲めるような雰囲気ではなかったが、ここでは誰も気にしない。人心地つけて、さて調査報告書を書こうか、という段になってラップトップをどこかに置き忘れてきたことに気がつく。博物館のハシムさんのオフィスに忘れてきた気がするが、すでに閉まっている。しかたないので、iPadのメーカーでレポートを書く。夜はビールを飲めるところへ行くが、あまり食欲はないのでスープのみいただく。

9月8日

朝7時半に皆で朝食。常木さんと西山さんはInitial Reportを仕上げている。図版も入れて30頁以上というからたいしたものである。iPadで試料リストを作り直し、輸出許可を申請するサンプルをもって全員で考古局へ。ハシムさんがちょうど来たところで、オフィスの鍵を

開けてくれる。案の定、ラップトップはソファの上に置き忘れてあった。カマルさんと相談して、今日中に空港まで荷物を持っていくことにする。常木さんたちとはここで別れ、空港で輸出荷物のチェックイン手続きをすませる。夜はYousifさんと約束して、西山さんも一緒にDiwanというレストランへ。なにも注文しないのにどんどん食事が運ばれてくる。盛りだくさんな定食らしいが、カバブが美味である。帰りがけに川沿いの盛り場で水たばこをやりながらアラックを飲む。

9月9日

西山さんは朝早くに出立する。今日は一人なので、朝10時半頃までホテルでゆっくりと過ごす。シャワーを浴び、あいさつに博物館に出かける。ハシムさんのところに最初に行くと、見知らぬ人がハシムさんと相談している。鑑定と売り込みをしているらしい。ハシムさんはもてあましているのか、こちらに話をふって、これは何だと思う、宝石か、とルーペまで渡して聞いてくる。しかたがないからちょっと見てみると、ちいさなdesert roseと、たぶ

んオフィカルサイトからとってきたカルサイトの小石、それから緑色のセラミックの飾り物である。そういうものでしょうね、と言って渡すと、そういうものだ、と説明している。しばらく話を続けていたが、あきらめたのか、握手をして帰って行った。カマルさんはアルビルで会議だそうだ。ハシムさんは空港まで公用車を使え、という。博物館をひとまわりして戻ると、12時に公用車をまわす、という。もう12時である。ハシムさんは1時から講義があるとかで、結局ここで別れを告げ、公用車で博物館からホテルまで送ってもらい、さっさと荷造りをしてチェックアウト、そのまま空港へ行く。Customで昨日チェックインしておいた荷物を受け取り、荷造りを終了。14時にはゲートが開いたので、荷物を預けて出国手続きを済ませる。時間があるので落ち着いた気分で報告書を書く。

スレイマニヤ考古局のカマル氏、ハシム氏には調査から試料の輸出にいたるまで、すべての面においてたいへんお世話になった。スレイマニヤ大学のYousif Mo-hammad博士には地質図を快く提供していただいた。これらの方々のご協力に感謝いたします。

カッパドキア遺跡・ウズムル教会の保存 にむけて(2014年度調査)



谷口 陽子

Yoko Taniguchi

筑波大学人文社会系・准教授

2014年9月1日から10日にかけてトルコ・カッパドキア遺跡の岩窟教会の保存に関する現地調査を実施した。メンバーは、私のほか、本科研の分担を担う小泉圭吾氏(大阪大学大学院工学研究科・地盤工学)、伊庭千恵美氏(京都大学大学院工学研究科・環境工学)と、協力をいただいている渡辺晋生氏(三重大学生物資源学研究科・凍土学)、朴春澤氏(株式会社ハイテック・地盤工学)、樋口諒氏(東京工業大学・総合理工学研究科博士課程大学院生・建築史)、吉岡瑞穂氏(京都大学工学部・学生)、柴田みな氏(東京文化財研究所アシスタント・建築設計)、ジェニファー・ポーター氏(壁画保存修復専門家/マルタ大学)の合計9名が参加した。

トルコ国会において関連法案が採択されなかったことにより、当初予定していたユネスコ日本信託基金が利用できない結果となったため、2014年9月に、急遽、トルコのネヴシェヒール保存修復研究所、ネヴシェヒール

博物館と筑波大学の3者で研究協定の合意書を結び、ウズムル教会(ブドウの教会)を対象に、凝灰岩製の遺跡保存のための共同研究を行うこととなった。ネヴシェヒール保存修復研究所からは、所長のFazil Açıkgöz(考古資料・壁画保存修復専門家)のほか、修復専門家としてUğur Yalçincaya氏、Merve Aziz Işin氏、Mustafa Toptepe氏、Ayça Baütürkmen氏、Tuğba Eryaşar氏と



合意書締結風景



微小環境観測ステーションの設置



微小環境観測ステーションとウズムル教会の風景



ウズムル教会周縁部への水分センサー埋設



透水試験風景

いった若手の専門家が参加してくれることとなった。また、カッパドキアの美術史、考古学の専門家としても知られるネヴシェヒール博物館館長Murat Gulyaz氏が参加してくださり、トルコ側もベテランと若手を揃え、トルコ人の若手専門家育成としても非常に有意義な調査チームの編成となった。

2014年の調査の主な目的は、(1)遺跡周辺の微小気象を把握するためのウェザーステーションを設置すること、(2)岩窟そのものの水分変動等を明らかにするため、ウズムル教会岩窟周辺で透水試験を実施するとともに、含水率、導電率、水分ポテンシャル等を測定するセンサーおよび温度/湿度センサーを埋設すること、(3)

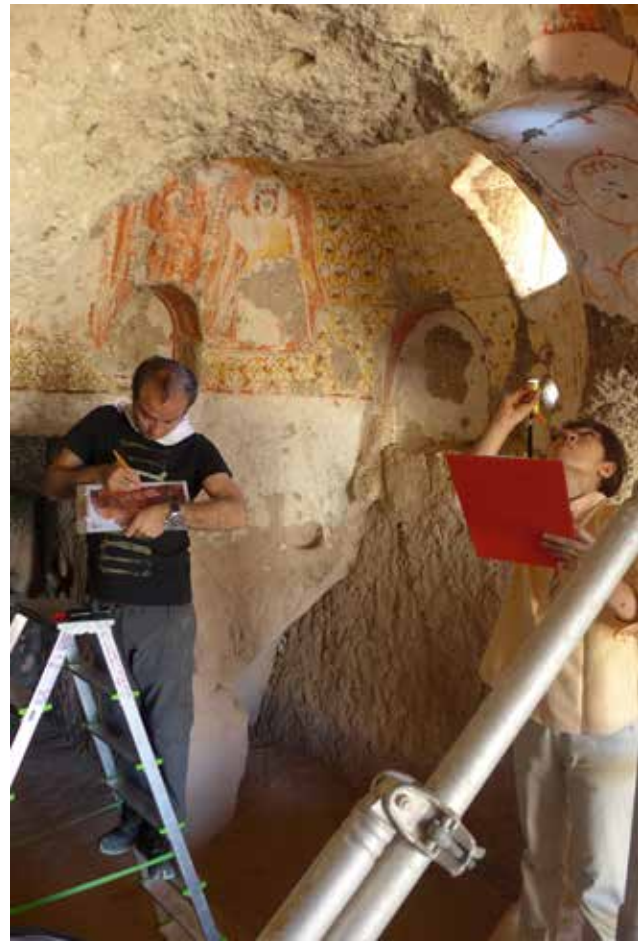
針貫入試験等により、凝灰岩の強度・劣化程度等の基本的なプロファイルを取得すること、さらには(4)ウズムル教会壁画の保存修復のための準備をすることとし、具体的には劣化状況ごとに状態調査図を作成し、材質調査のための微小試料を採取すること、であった。

はじめに、ウズムル教会そばに、降雨量、風速、風向、温湿度、日射量などを常時モニタリングするためのウェザーステーションを設置した。データロガーからの読み取り、ステーションのメンテナンス等の作業はトルコ側に委託できるよう現地研修を行った。

その後、各種のセンサーの埋設作業、現地試験等を実施するとともに、壁画や岩窟そのものの保存修復に向



ウズムル教会壁画の彩色サンプル採取の様子



壁画の状態記録のためのドキュメンテーション風景

けた光学調査、記録作業を行った。日中から夜間にかけての岩窟の表面温度の変化や、壁画の紫外線励起蛍光撮影を行うために、夕食後に現地調査を行った日もあった。観光客が多く、日差しの厳しい日中とまったく異なる雰囲気の中での調査は、ナイトハイクのような息抜きとなった。

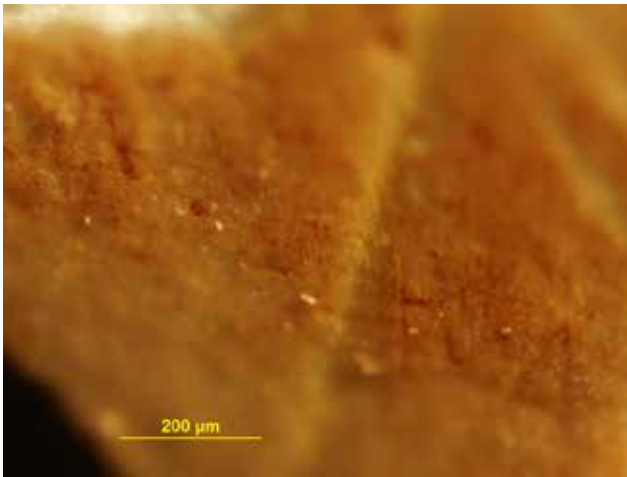
岩窟は非常にやわらかく固結状態が弱い火山灰堆積物からできているため、地衣類や藻類といった生物や、雪解け時期の凍結融解等によって表面の風化、劣化が進んでいる。場所によっては人頭大のブロックがいくつか落下しており、また、岩の亀裂が広がることにより、内部の壁画が大きく割れ、剥がれる結果ともなっている。岩窟はたびたび内部の教会構造を変えて作り直されているため、正確な開鑿年代は今のところはっきりしていない。壁画には、10-11世紀の様式に通じるモチーフが描かれていることから、ウズムル教会の最盛期はそのころであろうと考えられている。

かつてイタリア隊によって行われた壁画の材質分析によれば、赤色はレッドオーカー、黄色はイエローオーカー、緑はグリーンアースと報告されている。実際に現地において赤外線、紫外線を光源とした光学調査や、顕

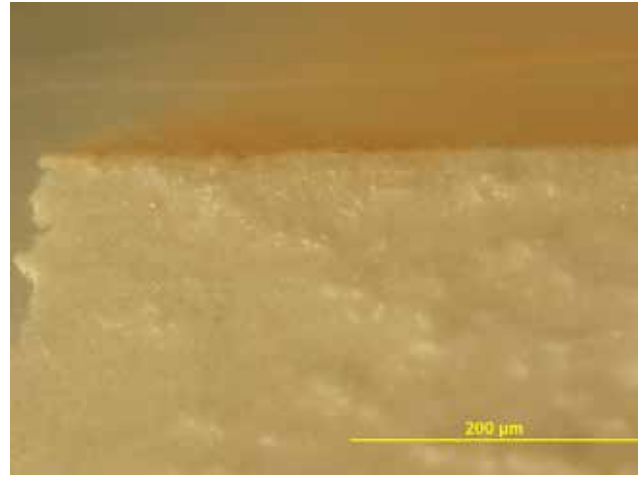
微鏡を用いた顔料粒子の観察等を行ったところ、オーカーとは考えられない黒色化を生じている赤色や、淡赤色が各所に認められた。微小試料を採取し、日本へ持ち帰ってクロスセクションを作成し、XRD、SEM-EDS等で分析を行ったところ、ウズムル教会には多量の鉛系顔料であるミニウム（鉛丹）が用いられていることが分かった。これは、人為的に鉛から合成することにより得られる顔料のひとつである。また、彩色はかなり薄い状態であ



データ解析方法の研修風景



壁画赤色部分 (UZM003) の彩色サンプルのBM像



壁画赤色部分 (UZM003) の彩色サンプルのクロスセクション

り、これが彩色技術によるものなのか、経年による影響であるのか、悩ましいものであった。

また、抗体抗原反応を利用したELISA法や、Nano-LC-ESI-MS/MS法により、膠着材分析を行ったところ、驚くことに多糖類や膠などタンパク質を含んだ有機物はまったく検出されなかった。試料の状態から水溶性の彩色であることは確認されているので、油やワックス等の材料とは考えられない。つまり、ウズムル教会の壁画は、大変珍しいことに、検出可能な濃度の有機物質を含まない絵具で描かれたものであろうと想定され、その結果、経

年の影響により、顔料粒子が物理的に取れやすい状態であるために、彩色層が年々薄くなっているのではないかと考えている。すなわち、水の関与に対して極めて弱いものともいえるので、保存修復を行う際の材料選定の上でも、考慮する必要がある。

現地からは、劣化機構の調査研究や材質分析だけではなく、共同での保存修復作業の実施を強く求められている。来年度からは、岩窟の劣化抑制と壁画の保存修復、遺跡管理といった項目を加えて、共同調査を行う予定である。

イラン地質調査所による考古地質学 ワークショップに参加して

久田健一郎¹・丸岡照幸²・八木勇治³・安間了⁴・三宅由洋⁵

Ken-ichiro Hisada・Teruyuki Maruoka・Yuji Yagi・Ryo Anma・Yoshihiro Miyake

筑波大学生命環境系 (1-4)・筑波大学生命環境学研究所 (5)

IGCP589国際シンポジウム会場となったアミールキャピール工科大学

2014年10月18日にイラン地質調査所において、標記ワークショップが開催された。当初、2014年2月11日に開催された第32回国際・第1回国際地球科学会議 (newsletter, vol.4参照)の期間中、フランス・パリ地球物理研究所のProf. Gallet YvesおよびProf. Cogne Jean-Pascalとイラン地質調査所のDr. Pedram Navyから、出土陶器片のSampling for archeointensityに関する共同研究が西アジア文明センターに提案され、それに関する3機関合同によるワークショップを開催する予定であったが、結局、標記のような形で開催された。

日本側から、丸岡、八木、久田、三宅が参加した。また本ワークショップは、10月19日から26日までイラン地質調査所主催で開催されたIGCP589(ユネスコと国際地質学連合の国際地質対比計画589プロジェクト;リーダー Prof. Jin Xiaochi(中国)、Prof. Ueno Katsumi(福岡大学)、Prof. Yumul, Jr. Graciano(フィリピン)、Dr. Chaodumrong Pol(タイ国))国際シンポジウムの前日の行われたことから、リレー会議形式の開催となった。安間はIGCP589からの参加であった。

本ワークショップの目的は、イラン地質調査所の分析機器などの研究設備の視察と、研究者間情報交流であった。18日午前中は、イラン地質調査所活構造・古地震学セクションのDr. Hamid Nazariとイランの考古地質学の状況について話し合われた。特にNazari博士はイラン国内の岩石線画(petroglyph)に詳しく、産出状況や保存状況について説明いただいた。また午後は丸岡、八木が分析部門を訪れさまざまな分析機器を視察した。

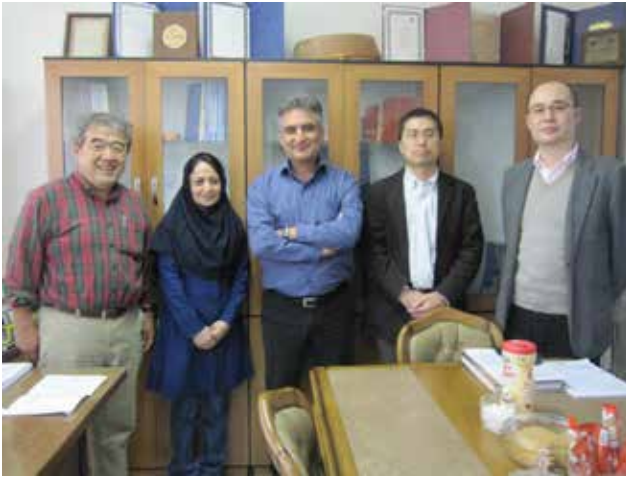
地質調査所の分析部門にはX線回折装置 (XRD)、蛍光 X 線分光装置 (XRF)、ICP-発光分析装置 (ICP-AES)など地質試料を扱う一通りの装置が備えられていた。研究所内の研究者だけでなく、外部からの試料の分

析も行われていた。地質試料だけでなく、セラミックスなどの工業製品も持ち込まれることがあるとのことであった。最新鋭の分析機器(ICP-質量分析計[ICP-MS]など)はテヘラン市内にはなく、テヘランから20km程度西にあるKarajという町にある別の部署にまとめて導入されている(時間がなく訪問できなかった)。これらの装置は地質調査所として必要であれば手に入れることは可能であるが、その利用に必要な国際標準試料に輸入制限があるため、困っているという話であった。同位体比、化学組成を学術論文に報告するときには、これらの標準試料との比較が求められるが、これらは国際原子力機関(IAEA)や米国国立標準技術研究所(NIST)が管理し、販売している。その使用が制限されると研究に支障が生じることになる。

夜は、IGCP589国際会議日本人参加者とともに、Dr. Pedram Navy宅に招待され、考古地質学やイラン・日本の文化史などについて歓談することができた。プレ巡検会は、19-20日の2日間、テヘラン北方のア



イラン地質調査所中庭の巨大火山弾と丸岡・三宅・八木(左から)



Dr. Hamid Nazariの研究室で;左2番目はMonireh Poshtkahi女史



IGCP589のプレ会議野外巡検－エルボルツ山脈横断

ルボルズ(Alborz)山脈で行われた。参加者は、合計6ヶ国15名であった。巡検ルートは、テヘランからチャールス・ロードを通してカスピ海のリゾート・チャールスで一泊、2日目はハルズ・ロードを通してテヘランに戻るコースであった。初日は、カンブリア紀や始新世の陸源性碎屑岩類、2日目は白亜紀の火山岩や石灰岩・石膏などをストップ露頭で観察し、また山脈を縦走する活断層群のつくる地形も観察した。

シンポジウムは21-22日の2日間、テヘランのアーミールキャビール工科大学(Amirkabir University of Technology)にて開催され、10カ国から27人が参加した。1日目は開会式および16件の口頭発表が行われた。また、2日目は午前中に6件の口頭発表、午後にはポスター発表およびビジネスミーティングが行われた。今回のシンポジウムでは、2日間を通して、

古生物学、層序学、岩石学、地球化学、堆積学、古地理学、テクトニクス、地質年代学など、様々な分野の発表(口頭22件、ポスター11件)があった。なお久田はObduction of Neyriz ophiolite -proposal for detrital chrome spinel study- の口頭発表を、三宅はProvenance shift based on occurrence of detrital chromian spinels in the Lower Cretaceous of Chichibu Belt, Kyushu, SW Japanのポスター発表を行った。

今回のIGCP589の国際シンポジウムは、2月に開催された第32回国内・第1回国際地球科学会議に続いて、イランの地質関係機関としては、イラン・イスラム革命後の久しぶりの国際会議と聞く。イランもようやく国際舞台の壇上に上がった感じがするが、このまま順調に国際化が進むことを期待する。

西アジアにおける宗教伝統の継承と変遷 ～西洋史と東洋史の断絶を超克する～



柴田 大輔

Daisuke Shibata

筑波大学人文社会系・准教授

括弧付けでの「政治」と「宗教」という課題に取り組む本研究班は、古代に重点を置きつつも、現代まで見据えたマクロな西アジア史におけるこの課題に取り組み、様々な研究集会を開催してきた。

これまでの取り組みのなかで浮上してきた問題点の一つが、「古代オリエント史」という名前で通称される古代西アジア世界に関する研究と7世紀の「イスラーム誕生」以後を扱った研究の学的な断絶である。地域に着目した地域史という歴史研究のあり方も近年では疑念が呈されているが、西アジア地域に関してはこの疑念以前に実は地域史すら確立していないのである。特に、西洋史対東洋史という世界史の二項対立が未だ覇権を行使している日本では、「古代オリエント史」は(「西洋文明」の基礎として)西洋史、「イスラーム史」は(「西洋」ならざるものとして)東洋史の学科にそれぞれ組み込まれている。現代の西アジアにおける宗教問題に関する歴史的背景の探究も始原は「イスラーム誕生」に求められることが多い。このような状況にも鑑み、本研究班はポスト「古代オリエント世界」・プレ「イスラーム世界」に位置付けられがちな古代末期・中世初期に研究重点の一つを置いている。



2014年11月23日に早稲田大学高等研究所の大会議室において開催した本会合では、精力的に研究を発信している青木健氏を講演者に迎え、古代末期西アジアの宗教伝統に関する公開討論を行った。講演において青木氏は、『旧約聖書』・『新約聖書』を中心に展開する「聖書ストーリー」という視点によって古代末期西アジアにおける混沌とした諸々の宗教伝統を理解していくことを提案した。これに対し、古代史・中世史・考古学の専門家(亀谷学氏・有松唯氏・河合望氏・報告者)から質問とコメントを行った。講演とその後の討論には会場からも多くのさらなる質問とコメントが寄せられた。

会合には、様々な分野の研究に取り組む専門家や学生、そしてこの問題に関心を持つ多くの人々が集まり、百人以上の集会を開催できる大会議室も満員となった。

公開研究会
西アジアにおける宗教伝統の継承と変遷
～西洋史と東洋史の断絶を越克する～

講演者
青木 健 (慶應義塾大学)

講演題目
古代末期オリエントの宗教から
イスラームへ

報告者
河合 望 (早稲田大学: エジプト学)

コメントレーター
亀谷 学 (北海道大学: 中世西アジア史)
有松 唯 (東北大学: 西アジア考古学)
柴田大輔 (筑波大学: 古代メソポタミア史)

2014年11月23日(日)

14:00-15:30 講演
15:30-17:00 コメント・ディスカッション

早稲田大学早稲田キャンパスA9号館5階第1会議室

http://www3.ripi.hokudai.ac.jp/symposium

WIAS 国際文化学研究所
ICR 国際文化研究センター
早稲田大学

“Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources”

「新アッシリア研究における異種資料の相互作用・相互影響・相互補完」

山田 重郎

Shigeo Yamada

筑波大学人文社会系・教授

2014年12月11-13日、筑波大学キャンパス内とつくば国際会議場において、表題のテーマで国際会議を開催した。当初は、2日間の会議を予定していたが、国内外から予想以上に多くの参加者を得て、実質2日半のイベントとなった(プログラムは以下を参照)。

19世紀に北メソポタミア各地で英仏独の発掘隊が、ドウル・シャルキン、カルフ、ニネヴェ、アッシュルといったアッシリア帝国の主要都市の遺構を次々と発掘し、多くの文字史料と考古遺物が発見されて以来、前8-7世紀に西アジアの広域に君臨した国家アッシリアは古代西アジア史における際立った現象として注目を集めてきた。東はザグロスから西はアナトリア、地中海、エジプトにおよぶ広域を直接間接に支配したこの国家は、多言語、多民族、多文化を包含し、しばしば「帝国」の祖形とみなされてきた。新アッシリア時代の文書史料研究は、20世紀後半には、より古い時代の楔形文字文書史料や考古学的データが次々と発見されたことにより、相対的に注目度が低下した。しかし、1980年代から複数の大規模プロジェクト(State Archives of Assyria Project [Helsinki], Royal Inscriptions of Mesopotamia Project [Toronto], Royal Inscriptions of Neo-Assyrian Period Project [Philadelphia], Assur Project [Heidelberg, Berlin]等)が進展し、多様で大量の文書が文献学的に高い精度で体系的に編集・出版され、地図、人名事典、インターネットによる資料の公開等、斬新な研究ツールが提供されたことで、新たに研究が活性化した。こうして、多様なジャンルの文書を複合的に用いる応用的研究を実施するのに有利な環境が整ってきた。

2014年9月22-25日には、新アッシリア研究の拠点

の一つであるヘルシンキ大学において、多様な文書史料、考古学史料を横断的に再評価して、新アッシリアの歴史をどのように復元・評価するかを再考する国際会議が開催されている(Conference “Writing Neo-Assyrian History: Sources, problems, and approaches”)。我々の今回の学術会議は、こうしたトレンドを踏まえつつ、異種資料を複合的に用いて行う個別研究の発表を通して、新アッシリア時代の歴史と文化に関する応用研究の前線を探ろうという試みである。参加者は、日本、イギリス、ドイツ、オーストリア、フィンランド、アメリカ合衆国から16名が発表者として参加したほか、オブザーバーとして国内の研究者、学生など15名ほどが出席した。



PROGRAM

Day 1 (Dec. 11 Thu., University of Tsukuba)

12:00–13:00 Registration and refreshment
(Research Center of West Asian Civilization)
13:20 Welcome address
(Building of Advanced Study B, 609–1)

Session 1: Chair: Shigeo Yamada

13:30–14:20 Sebastian Fink,
“Different sources – different kings?: the picture of the
Neo-Assyrian king in inscriptions, letters and literary texts”

14:20–15:10 Raija Mattila,
“The military role of magnates and governors: royal
inscriptions versus archival and literary sources”

(30 minutes coffee break)

15:40–16:30 Jamie Novotny,
“Late Neo-Assyrian building histories: tradition, ideology,
and historical reality”

16:30–17:20 Shuichi Hasegawa,
“Use of archaeological data for the investigation of the
itineraries of Assyrian military campaigns”

18:00- Welcome party at a cafeteria in the campus

Day 2 (Dec. 12 Fri., Tsukuba International Congress Center, 405)

Session 2: Chair: Daisuke Shibata

10:00–10:50 Greta Van Buylaere,
“Tracing the Neo-Elamite kingdom of Zamin in Neo-
Assyrian and Neo-Babylonian sources”

10:50–11:40 Shigeo Yamada
“Ulluba and its surroundings: Tiglath-pileser III’s province
making facing the Urartian border reconsidered from royal
inscriptions and letters”

(11:40–13:30 Lunch break)

Session 3: Chair: Raija Mattila

13:30–14:20 Robert Rollinger,
“Yawan in Neo-Assyrian sources: monumental and archival
texts in dialogue”

14:20–15:10 Sanae Ito,
“Propaganda and historical reality in the Nabû-bêl-šumāti
affair in letters and royal inscriptions”

(15:10–15:40 coffee break)

15:40–16:30 Andreas Fuchs,
“How to implement safe and secret lines of communication
using Iron Age technology: evidence from a letter to a god
and a letter to a king”

16:30–17:20 Jamie Novotny & Chikako E. Watanabe,
“Unraveling the mystery of an unrecorded event:
identifying the four foreigners paying homage to
Assurbanipal in BM ME 124945–6”

Day 3 (Dec. 13 Sat., Tsukuba International Congress Center, 405)

Session 4: Chair: Robert Rollinger

10:00–10:50 Grant Frame,
“Lost in the Tigris: the trials and tribulations in editing the
royal inscriptions of Sargon II of Assyria”

10:50–11:40 Karen Radner,
“The last emperor: Aššur-uballiṭ II in archival and
historiographic sources”

(11:40–13:30 Lunch break)

Session 5: Chair: Chikako Watanabe

13:30–14:20 Saana Svärd,
“‘Doing gender’: women, family and ethnicity in Neo-
Assyrian letters and royal inscriptions”

14:20–15:10 Silvie Zamazalová,
“Images of an omen fulfilled: *šumma ālu* in the inscriptions
of Sargon II”

(15:10–15:40 coffee break)

15:40–16:30 Mikko Luukko,
“The anonymity of authors and patients: some
comparisons between Neo-Assyrian correspondence and
Mesopotamian anti-witchcraft rituals”

16:30–17:20 Daisuke Shibata
“The Akitu-festival of Ishtar at Nineveh: royal inscriptions
and Emesal-prayers”

17:20 Closing remarks and some announcement

18:30 Reception at a restaurant around Tsukuba
International Congress Center



日光華嚴の滝にて(「見ザル、聞カザル、言ワザル」のアッシリオロジスト)

3日間のコンフェレンスでは、行政文書、法文書、書簡、王碑文、編年記、予兆文書、祈祷文書、文学文書、美術・図像資料、考古学的データなど、異なる史料を対比的・複合的に分析することで、為政者のイメージと政治的・行政的地位(Fink, Radner)、高級官僚の軍事的・行政的役割(Mattila)、アッシリアの行政州分割(Yamada)、アッシリアとその周の歴史と地理(Hasegawa, Van Buylaere, Rollinger)、アッシリア軍の兵站(Fuchs)、呪術や予兆観測と書簡、王碑文の文書的相関(Luukko, Zamazalová)、祈祷と祭儀地理(Shibata)、建築事業と記念碑文(Novotny)、軍事的・政治的事件の諸相(Ito, Watanabe)、王碑文編集の問題点(Frame)、ジェンダー(Svärd)といった多様なテーマに関する研究が発表され、活発な議論が交わされた。学術会議で読まれた論文は、ヘルシンキのNeo-Assyrian Text Corpus Projectが出版するシリーズState Archives of Assyria Studiesの一冊として出版することが決定している。

学術会議で一仕事を終えた後、翌日の1月14日には、会議参加者で日光への日帰りイクスカーションを楽しんだ。雪のちらつく寒空の下であったが、諸外国からの客人も、東照宮の複合的祭儀空間が多くの神殿や祠を内包する古代メソポタミアの都市空間に意外にも類似しており、おみくじがメソポタミアの予兆文書を連想させることに感心したり、自分の生年が寅年であることに満足したり、ネズミ年であることに落胆したりと大いに盛り上がった。その後、華厳の滝の水しぶきを浴びて歓声をあげて、温かいバスに飛び乗って、無事に筑波に帰還した。

謝辞:コンフェレンスは、日本学術振興会とフィンランド・アカデミーによる「2国間共同セミナー」基金、ならびに新学術領域研究の3件の楔形文字文書研究に関係する計画研究の資金によって開催された。実施に当たっては、筑波大学西アジア文明研究センターのスタッフから多大なご助力を得ており、これ無くして円滑な運営はあり得なかった。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



参加者全員で記念撮影

NHK BSプレミアム体感!グレートネイチャー 「潜入イラン!炎と緑の大地」撮影報告



タンゲシカンでの撮影風景(著者撮影)

久田 健一郎

Ken-ichiro Hisada

筑波大学生命環境系・教授

2014年3月、映像ドキュメント制作会社の海工房からグレートネイチャーの番組撮影に関する協力依頼があった。私がイランの地質に詳しいことから、そのような依頼になったのだと思う。幸い、イラン地質調査所から“Geoheritage Atlas of Iran” (Alireza Amrikazemi, 2013) という 500ページに及ぶ厚い写真集をいただいていたので、これを活用すれば、番組作成にお役に立てると思い、協力することにした。

まずは海工房の門田修、宮澤京子、松本正平の諸氏と面談し番組の趣旨を伺い、その後イランの地質の説明から始まった。こちらからのザグロス山脈形成史について説明の後、海工房側から「岩塩ドームを主題に」ということで、私のモチベーションも高まった。以前からイラン地質調査所を訪問するたびに、イランの地質遺産を

海外で紹介したいという趣旨の発言を関係者から伺っていたので、「これはうまく行く」と直感していた。また筑波大学西アジア文明センター関係者の一人として私としても、「西アジア文明センターの活動成果を紹介できれば」と目論んでいたのが、「グレートネイチャー」ということで、考古学ではなく自然を主にしたいという番組制作側の意図から、残念ながら考古地質学の成果は簡単な紹介で終わってしまった。

松本氏の事前調査後、2014年6月に1か月に及ぶザグロス山脈ロケが、松本氏、門田氏、そしてカメラマンの興正勝氏、音声担当の妹尾一郎氏(小型ヘリコプターによる撮影担当も兼務)によって実施された。現地では、政府公認イラン人ガイドのAli Pour氏、日本人コーディネーターの清水直美氏も同行していた。

私は実質3日間の同行撮影であったが、その行程は以下の通りである;第1日目シラーズーペルセポリスーアルサンジャンの行程で、ペルセポリスの東で大規模褶曲、アルサンジャンのタンゲシカン洞窟、タシク塩湖で撮影、第2日目シラーズ市内で撮影後、シラーズーノーラバッドの西で油田撮影、第3日目ノーラバッドからヤースーージュを経て、デナ山麓で撮影、シラーズに戻る。以下に番組を実録の流れをもとに紹介する。



デナ山の麓での化石撮影(著者撮影)

紙上再現 “体感!グレートネイチャー”

外国人の立入が厳しく制限され、長く閉ざされていたイランだが、2013年大幅に規制が緩和された。日本のテレビ初の本格取材で、イランの自然の奇跡の光景にせまる。

緑あふれる自然が息づく豊かな大地を懐に抱くザクロス山脈。アルプスを彷彿させる4000m級の山々は、山全体が石灰岩でできている。この山々はサンゴ、貝類など様々な生物の遺骸でできており、それは太古、浅い海であった証でもある。

2億年前、パンゲアがローラシアとゴンドワナに分かれ、そのあいだにテチス海が誕生した。その後、アラビアプレートがユーラシアプレートにぶつかって、石灰岩がたまったテチス海が押し上げられ大山脈ができた。この光景は、大地のすさまじいエネルギーが作り出したものなのだ。



資料提供: NASA
取材協力: Geological Survey of IRAN, Shiraz University, NiOC Exploration, JOGMEC
制作・著作: N H K 海工房



シレッツ渓谷では、およそ6kmにもわたり、テラス状に幾重にも重なった石灰岩のきれいな縞模様を見ることが出来る。ザクロス山脈に降った雨や雪が作り出した流れは、長い間に石灰岩を削り、独特の景観を作り出した。

ラームホルムズでは、荒涼とした原野の山裾の沢から水が湧き出ている。水と共に接着剤のような粘着性がある天然のタールが湧き出している。そして、その先に2000年も前から燃え続けている山がある。いたるところにイオウの匂いがたちこめ、噴出するガスから炎が上がっている。山を覆い尽くす永久不滅の炎。暗くなるとあたりは荘厳な空気に包まれ、地元の人々は畏敬の念を持ち、大切に見守ってきた。炎を上げるザクロスの大地。こ

こは、イラン屈指の油田地帯。太古のテチス海は熱帯の海だった。長い間にプランクトンの遺骸が石油となり、石灰岩の中に蓄えられた。大陸衝突によって石灰岩の地層が褶曲し、石灰岩に含まれる石油は高低差ができた地層の中を上へ上へと移動した。そして、褶曲によってできたお椀型の石灰岩の層が石油の貯まるタンクとなった。



ダシュティ山(1496m)。ここは気温40℃にもなる乾燥地帯。山全体が塩でできており、鉄分が特有の赤い色を放つ。6億年前に堆積した塩の層の上に7000mの石灰岩の地層ができ、石灰岩の重みで塩の層は圧迫を受け、絞り出されるように上昇。そこに大陸衝突が起こり横からも力を受けさらに上昇、2000年前ついに地表へ。そして周囲の石灰岩を覆い尽くした。こうしてできた塩の山が岩塩ドームと呼ばれている。石灰岩の洞窟では、古代の人々の営み、人類の痕跡が見つかる。緑豊かな大地ザクロス。そこには、自然に寄り添う



暮らしがある。

ペルシャ湾にある島、ゲシュム島。沖縄本島位の島に7kmの岩塩ドームがある。雨季の洪水で塩が削られ、地底に6.4kmにも及ぶ塩の洞窟ができた。塩分濃度36%というアラビア半島の死海を上回る塩水の池や、雨が降った数日後に起こる崩落現場、這って進むのがやっとの隙間を進むと、そこには太古の塩の層、神秘の光景が広がっていた(写真提供:海工房)。

文部科学省による本科学研究費助成研究事業中間評価を受けての将来検討会

常木 晃・久田 健一郎・山田 重郎

Akira Tsuneki・Ken-ichiro Hisada・Shigeo Yamada

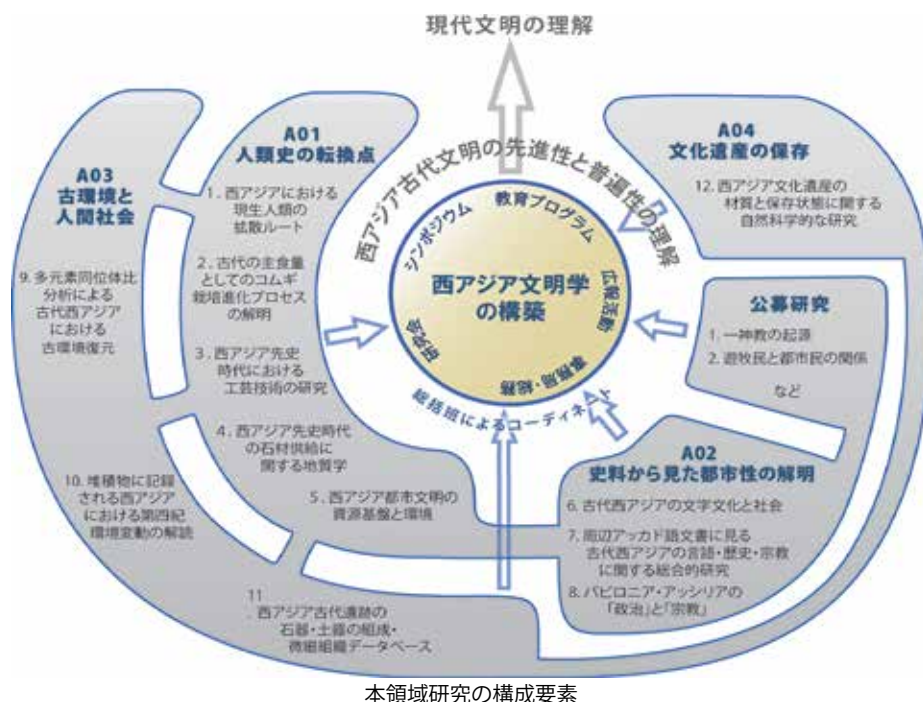
筑波大学人文社会系・教授, 生命環境系・教授, 人文社会系・教授

平成26年10月、我々の「新学術領域」科学研究費補助金助成事業に対する中間評価の結果が通知された。現生人類の拡散過程から都市文明の形成までの西アジアにおける歴史的推移を、人文科学分野と自然科学分野の専門研究者が協働して総合的に捉えようとする本研究領域の積極的な活動は、概ね好意的に評価された。しかし、一部の研究計画に遅れがみられる点と、計画研究間の相互参照や、分野横断的連携が不十分であり、領域全体として統一的知見の獲得に至る筋道が明確に示されていない点が、厳しく批判された。こうした指摘を真摯に受け止めて、今後の指針を探るための一助とすべく、2014年1月26日、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所技術アドバイザー)、宮下純夫(新潟大学名誉教授)、前川和也(京都大学名誉教授)の3名の外部評価委員を西アジア文明研究センターに招いて、総括班スタッフと各計画研究代表者を集め、本領域研究の反省と再検討のための会合を行った。

まず、本領域研究代表の常木から、2014年9月11日に文部科学省で行われた中間評価のヒヤリングの概要、ならびにこの度10月に出された中間評価について報告が行われた。

その後、外部評価委員の方々からコメントをいただき、それをベースに、今後の

活動についての討論を行った。討論を通して、イスラム期以前の古代西アジア文明の基層を研究する我々の領域研究の独自性と、それを解明するために実証研究を継続する重要性を確認するとともに、領域研究全体として、西アジアという地域を環境的・歴史的・文化的視点から複合的・総合的にどのように捉えるかという課題に対して、有意義な解答を与える努力が、強く求められていることを実感した。そこで、2014年6月26-27日に国内外の研究者を集めて行ったシンポジウム「西アジア文明学の創出1：今なぜ古代西アジア文明なのか」を通じて、本領域研究の関係者が共有し得た西アジアの環境と歴史に関する認識を踏まえて、今後どのような具体的な企画を打ち出すべきかを議論した。即席に明快な結論

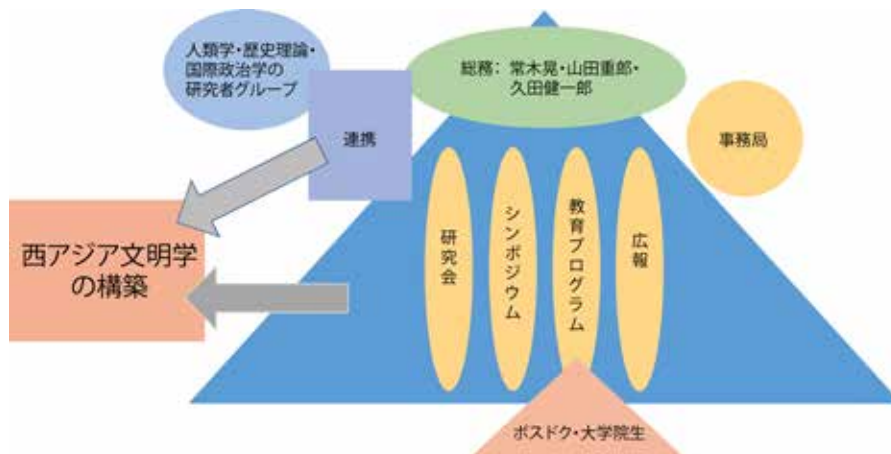


今後の領域の推進方法

- ・ 1階部分に当たる各歴史プロセス研究の一層の充実
特に西アジア地域で欠けていたピースを繋ぐ努力
- ・ 2階部分に当たる歴史プロセスの先進性と普遍性の追究
2014年6月末のシンポジウムと同様の取り組みを充実させること
- ・ 3階部分に当たる西アジア文明学の創造
古代西アジア研究が、現代史とどのように関わりを持てるかを真剣に議論
2013年7月シンポジウム「西アジア・北東アフリカ史における政治と宗教再考」
2014年3月研究会「西アジア史の可能性」などの取り組みの充実



今後の領域の推進方法



総括班の研究体制について

を得ることは望むべくもないが、以下の3点に特に議論が集中した。

(1) 人類学、歴史学、地域研究分野の研究者を交えて、我々の古代西アジアについての認識を再評価することで、西アジア文明の先進性、普遍性の解明、「文明の衝突論」の批判的検討等を試みる。

(2) 西アジアの考古遺物や建築遺産をめぐる問題の

諸相を総合的に考える機会を設けること。

(3) 西アジア世界の環境的・文化的・歴史的一体性の検討を目的として、環境、物流、文字文化、生活技術などについて、複数の研究を実施する。

こうしたアイデアをどのような優先順位とタイムスケジュールで、いかに実施に移していくのかについては、今後具体的に検討することになる。

シンポジウム・研究会開催予定

平成27年3月26日(木) 計画研究03連続講演会「先史時代のカッパドキア:アシュックル・ホユックと中央アナトリアの先土器新石器時代」 於:筑波大学総合研究A棟 107

講師: Mihriban Özbasaran (Istanbul University, Turkey) “Transition to an Innovative Way of Life: Aşıklı Höyük (Central Anatolia - Turkey)”

講師: Nurcan Kayacan (Istanbul University, Turkey) “Change and Continuity in the Lithics of Aşıklı Höyük (Central Anatolia - Turkey)”

活動履歴 (平成26年9月～平成27年3月 フィールド調査は除く)

平成26年11月10日 第22回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成26年11月23日 計画研究08研究会「西アジアにおける宗教伝統の継承と変遷～西洋史と東洋史の断絶を超越する～」
於:早稲田大学早稲田キャンパス9号館5階第1会議室

発表者: 青木 健(慶應大学)「古代末期オリエントの宗教からイスラームへ」

平成26年11月28日 2014年度第11回定例研究会 於:筑波大学総合研究A棟 107

発表者: 下岡 順直(立正大学)「考古学におけるルミネッセンス年代測定法の利用」

発表者: 南 雅代(名古屋大学年代測定総合センター)「考古学分野における14C年代測定の意義と限界」

平成26年12月11日、12日、13日 シンポジウム“Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources”

於:筑波大学総合研究B棟609-1号室(11日)、つくば国際会議場:405会議室(12日、13日)

発表者: Sebastian Fink (Universität Innsbruck) “Different sources – different kings? The picture of the Neo-Assyrian king in inscriptions, letters and literary texts”

Raija Mattila (University of Helsinki) “The military role of magnates and governors: royal inscriptions versus archival and literary sources”

Jamie Novotny (University of Pennsylvania) “Late Neo-Assyrian building histories: tradition, ideology, and historical reality”

Shuichi Hasegawa (Rikkyo University) “Use of archaeological data for the investigation of the itineraries of Assyrian military campaigns”

Greta Van Buylaere (Universität Würzburg) “Tracing the Neo-Elamite kingdom of Zamin in Neo-Assyrian and Neo-Babylonian sources”

Shigeo Yamada (University of Tsukuba) “Ulluba and its surroundings: Tiglath-pileser III’s province making facing the Urartian border reconsidered from royal inscriptions and letters”

Robert Rollinger (Universität Innsbruck) “Yawan in Neo-assyrian sources: Monumental and archival texts in dialogue”

Sanae Ito (University of Helsinki) “Propaganda and historical reality in the Nabû-bêl-šumâti affair in letters and royal inscriptions”

Andreas Fuchs (Universität Tübingen) “How to implement safe and secret lines of communication using Iron Age technology: evidence from a letter to a god and a letter to a king”

Jamie Novotny & Chikako E. Watanabe (Osaka Gakuin University) “Unraveling the mystery of an unrecorded event: identifying the four foreigners paying homage to Assurbanipal in BM ME 124945-6”

Grant Frame (University of Pennsylvania) “Lost in the Tigris: the trials and tribulations in editing the royal inscriptions of Sargon II of Assyria”

Karen Radner (University College London) “The last emperor: Aššur-uballit II in archival and historiographic sources”

Saana Svärd (University of Helsinki) ““Doing gender”: women, family and ethnicity in Neo-Assyrian letters and royal inscriptions”

Silvie Zamazalová (University College London) “Images of an omen fulfilled: *šumma ālu* in the inscriptions of Sargon II”

Mikko Luukko (Universität Würzburg) “The anonymity of authors and patients: some comparisons between Neo-Assyrian correspondence and Mesopotamian anti-witchcraft rituals”

Daisuke Shibata (University of Tsukuba) “The Akitu-festival of Ishtar at Nineveh: royal inscriptions and Emesal-prayers”

平成26年12月22日 第23回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年1月25日 計画研究03研究会「西アジア先史時代における工芸技術の研究 第4回研究会」
於:筑波大学東京キャンパス文京校舎432講義室

発表者: 松本 建速(東海大学)「サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡出土土器の化学組成と胎土構成物質との関係」

発表者: 齋藤 正憲(早稲田大学本庄高等学院)「炎を操る匠たち:土器焼成の民族誌」

発表者: 清水 康二(榎原考古学研究所)「アジアに広がる高錫青銅器の起源を探る」

発表者: 長柄 毅一(富山大学)「現代に残る古代アジア高錫青銅器の製作技術」

平成27年1月26日 第24回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年1月26日 文部科学省による本科学研究費助成研究事業中間評価を受けての将来検討会
於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年2月16日 第25回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

平成27年2月20日 計画研究07研究会「David I. Owen(コーネル大学教授)講演会」 於:筑波大学プロジェクト研究棟
発表者: デイヴィッド・オーウェン(コーネル大学)「争乱の時代におけるアッシリア学:CUSAS出版プロジェクトの貢献」

平成27年3月8日 計画研究08研究会「西アジア史における「政治」と「宗教」～中世イスラーム世界とユダヤ世界～」
於:筑波大学東京キャンパス文京校舎118講義室
発表者: 亀谷 学(北海道大学)「初期イスラーム時代における統治とその理念」
嶋田 英晴(東京大学)「中世イスラーム世界におけるユダヤ自治」

平成27年3月23日 第26回総括班会議 於:筑波大学プロジェクト研究棟

2012-2016年度 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究(研究領域提案型)」
「現代文明の基層としての古代西アジア文明－文明の衝突論を克服するために－」

ニュースレター Vol. 5

平成 27年 3月 25日 発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究(研究領域提案型)」
「現代文明の基層としての古代西アジア文明－文明の衝突論を克服するために－」
領域代表 常木 晃

編集： 総括班編集委員

印刷： 前田印刷株式会社

〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻事務室 付 西アジア文明研究センター

Eメール： rcwasia@hass.tsukuba.ac.jp

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken>



Newsletter Vol.5

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken>